

シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅱ〕 ～デカルトのアリストテレス的用法とその認識論～

村 上 吉 男

今回は同じ表題の続稿〔補Ⅱ〕として、〈日常的用法〉における認識論がデカルトにより提示されていることを確かめておかねばならない。まず彼が〈日常的用法〉を打ち出すとみるは以下の引用文による。

2. 〈日常的用法〉は感覚や想像を〈考慮に入〉れる (または〈思惟する〉) ことにある

⑬ Mais cependant il faut prendre garde à la différence qui est entre les actions de la vie et la recherche de la vérité, laquelle j'ai tant de fois inculquée; car, quand il est question de la conduite de la vie, ce serait une chose tout à fait ridicule de ne s'en pas rapporter aux sens. ⁽²⁵⁾

しかしながら、わたしが何度も示した相違に、つまりは生活の行動と真理の探求との相違に注意しなければならない。なぜなら、生活を導くことが話題になる際には、感覚を信頼しないということはまったく不合理なことであろうからである。

ここに〈sens〉と記されるかぎり、その訳語〈感覚〉はむしろ身体の感覚である。筆者は、次の引用文をさらに加えさせつつ、なぜ〈真理の探求〉たる用法と異なる、〈生活(の行動)〉に根づく用法があると語られるのかを、この〈感覚(sens)〉を例にして明らかにする必要がある。

⑭ C'est en usant seulement de la vie et des conversations ordinaires, ... qu'on apprend à concevoir l'union de l'âme et du corps. ⁽²⁶⁾

精神と身体の（心身）合一は、日常生活と日常的会話を通して、はじめて理解されるようになる。（括弧内は筆者）

引用文⑬の〈わたし（デカルト）〉が〈生活を導く〉にあつて〈感覚を信頼せざるを得なくなるは、同⑭の〈âme（精神）〉という〈腺H〉が〈感覚（身体のsens）〉たる能力を、これもまた〈âme〉という〈脳本体〉が〈腺H〉で産出するが、〈腺Hの表面〉に伝わらない〈sentiment〉たる能力や〈身体sens〉のままでも伝わるその能力をそれぞれ受け入れることを彼が容認するからだ⁽²⁷⁾。

しかも強調文である引用文⑭の〈日常生活と日常的会話〉の語意から、おのおのは両〈âme〉に受容される諸〈感覚〉なしに成り立たないことが、さらにデカルトがこのかかわりを〈生活〉経験に求める見通しのうで、〈心身合一〉を語るのであり、その逆ではないことが示唆される。かつそこには、〈je comprends, donc j'ai un esprit distinct du corps（わたしは理解する、それゆえにわたしは身体（感覚）と区別された精神（esprit）を有する（括弧内は筆者）〉⁽²⁸⁾との一見経験から独立した、〈真理の探求〉の用法があつたのと同様に、〈心身合一〉を強調する以上は〈日常生活と日常的会話〉と諸〈感覚〉（あるいは他の能力）の関係を展望させる用法がなければならなくなる。これにふさわしい語は、彼のいう〈l'usage ordinaire〉⁽²⁹⁾しかなく、筆者はこの語を〈日常生活と日常的会話〉という各邦語にならつて、〈日常的用法〉と訳すわけである。

身体（の感覚）を取り込む〈日常的用法〉はなるほど、〈感覚〉を基軸とした認識論を可能にし、〈心身〉を結合させずにおかなくなる。だがこのとき、〈心身合一〉の一方の〈精神〉の語は〈esprit〉でなしに、〈âme〉であることに注意するにせよ、デカルトが〈心身合一〉は成ると主張することは妥当なのか質されてくる。筆者は、〈esprit〉と〈âme〉の相違や〈日常的用法〉の認識論と〈心身合一〉がみられるかどうかに関しては他を参照⁽³⁰⁾というにとどめ、ここでは以下のことを指摘しておくことにする。

要は、〈真理の探求〉と〈日常的用法〉の各認識論において、いずれにも〈身体感覚（sens）〉と〈感覚（sentiment）〉が〈腺H〉や〈脳本体〉のそれぞれに受容されると認めてよいにもかかわらず、〈真理の探求〉の認識論は〈腺H〉や〈脳本体〉の両方が〈sens〉と〈sentiment〉を「遮断排除」する、換言すると〈考慮に入れない（思惟しない）〉点に、〈日常的用法〉の認識論は〈腺H〉

や〈脳本体〉の両方があらゆる〈感覚〉を〈考慮に入〉れる（思惟する）点に各違いをば見定め得るということである。なおまたそこで肝要なことは、両用法でのあらゆる〈感覚〉が〈腺H〉や〈脳本体〉のおのおのまで同じ成り行きで伝えられることにある。デカルトのいう用法ごとに、〈わたし〉が〈esprit〉や〈âme〉のどちらかを有するとみなされるにしる、〈わたし〉は現実には一つの精神しかもち合わせていない以上は、かの〈感覚〉の伝達が一つの精神としてはその途中まで「同じ成り行き」に適うと捉えられるは当然であろう。

しかしながら、その一つの精神たる、〈真理の探求〉の〈esprit〉にあっては、この〈精神〉はすでにみたように、〈腺H〉を身体（脳）と断じていたからして、〈脳本体〉だけをささずにおかなくするし、しかもある〈作為観念〉を誕生させたり、その〈生得観念〉に達し得たりする、こうした〈観念〉によってしか、〈脳本体〉が〈esprit（精神）〉に〈取って代わ〉れないこと⁽³¹⁾が、またその一つの精神たる、〈日常的用法〉の〈âme〉にあっては、〈脳〉に含まれる、〈腺H〉や〈脳本体〉をはじめとした〈部分（部位）〉はすべて、〈âme〉といってよいから、〈腺H〉も〈脳本体〉も同じ〈âme（精神）〉の一であることがさらに確認されるべきである。

ところで〈日常的用法〉がデカルトの発案かという点、そうではない。それは前回引用文⑭をここに再び持ち出し問わずとも、彼自身がなおもこれについて語ろう次の文章で明確になるからである。

⑮ Lorsque je prends l'essence entière de la chose pour la cause formelle, je ne suis en cela que les vestiges d'Aristote. ⁽³²⁾

わたしが事物の全き本質を形相因とみなす（とき）、その点において、わたしはアリストテレスの一後継者でしかない。（括弧内は筆者）

上記引用文中の〈la chose（事物）〉はたとえば、〈思惟するもの（la chose qui pense）〉を含意させたからして、この〈事物〉を人間に当てはめると、少なくとも〈形相因〉と記されるころでは、その「質料因」がなくてはならず、人間は素材（身体）たる〈質料因〉にその〈本質〉をさす〈形相因〉を内在させ存在すると、要は人間には〈質料〉と〈形相〉が結び合わされているし、こ

れらは一対で相補的なものであると受け取ることができる。

①実体という語は一つの意味では質料としてのもので、これはこれだけでは「このもの」〔個物〕ではない、また他の意味では型式（形式）、あるいは形相で、これによって初めて「このもの」と言われる。⁽³⁵⁾（丸括弧内は筆者）

人間の〈靈魂 (psykhē)〉⁽³⁴⁾にしてからがそうなのである。筆者は前段にいう人間をたとえにとり、さらにアリストテレスに、〈このもの〉を人間の〈靈魂〉にしてその結合体での〈形相〉のことを語らせるならば、〈形相〉は〈靈魂〉となろうし、諸能力で満たされるそのなかでは、〈形相〉中の〈形相〉といえよう〈理性〉の一、すなわち〈能動的理性 (nous poiētikos)〉であろうと捉えおく。

②靈魂は... いくつかの能力の原理であって、... 栄養的、感覺的、思考（惟）的能力、および運動によって規定された...。⁽³⁵⁾（括弧内は筆者）

③何故なら靈魂のうちにあるのは石ではなくて、その形相だからである。従って靈魂は手のようなものである。何故なら手は道具の道具であり、理性（能動的理性）は形相の形相であり、感覺は感覺されるものどもの形相であるからである。... 感覺される形相のうちに思惟されるものどもはある。⁽³⁶⁾（括弧内は筆者）

ところがアリストテレスはまた、④の〈理性（能動的理性）〉のほかに、〈受動的理性 (nous pathētikos)〉を打ち出してくる。それは同じ④における〈思惟されるもの（能力）〉であるからである。そしてこの〈受動的理性〉こそ、デカルトとは多少その用法に違いをみせるといえども、まずはデカルトのいう〈自然的理性 (raison naturelle)〉⁽³⁷⁾に充当するし、彼の〈日常的用法〉の精神、すなわち〈âme〉、さらにいう〈理性的精神 (âme raisonnable)〉⁽³⁸⁾にとっては、この〈自然的理性〉が〈âme〉に与する諸能力中の中核になると推察される。とまれアリストテレスにみる二つの理性については以下のような引用文に明らかであろう。

㊦感覚能力は身体（質料）なしには存しないが、しかし理性（能動的理性能力）は〔それから切り離された〕独立のものだからである。… 理性（能動的理性能力）は自分ひとりで自分の力によって思惟活動をすることができるのである。⁽³⁹⁾（丸括弧内は筆者）

㊧質料なしにあるものどもにおいては、思惟するものと思惟されるものとは同一であるから。…（理性はこのようなものども〔の形相を知るところ〕の、質料を持たない能力だからである）、他方理性は、「思惟されるもの」という属性を所有するだろう。⁽⁴⁰⁾

㊨この理性（能動的理性）も〔質料から〕独立で、不受動的で、まじり気のないもので、その本質からみれば、現実活動である。… 受動的理性の方は可滅的なものだからである。⁽⁴¹⁾（丸括弧内は筆者）

アリストテレスの、〈個物〉が〈質料〉と〈形相〉の結合にあるのを証明した引用文㊦を除く、他の引用文にあって、㊦の〈思考（思惟）的能力〉を作用させ、㊦の〈思惟活動〉を促すはもとより、〈靈魂〉の諸能力中の㊦㊧㊨㊩のそれぞれに記される〈理性〉であり、㊦㊩の〈理性〉には〈能動的理性〉や〈受動的理性〉のあることが明かされる（諸引用文のうち、すでに丸括弧が付されていた㊧の〈理性〉に対して、筆者は筆者によるそれと区別させるべく、あえて丸括弧を加えなかったが、二度使用される〈理性〉の語はいずれも〈能動的理性〉に置換し得る、ただし二度目の語〈理性〉は次段落以降に記す通り、他意をもち合わせずにいないとここで指摘しておく）。

その〈能動的理性〉と〈受動的理性〉に関しては、引用文㊦が語ることにとくに注意しておくべきである。そこに〈質料なしにあるものどもにおいては、思惟するものと思惟されるものとは同一である〉とある。複数の意を示唆させる〈ども〉がゆえに、〈ども〉には〈思惟するものと思惟されるもの〉が該当すること、このおのおのを順次、〈能動的理性〉と〈受動的理性〉たる〈もの（能力）〉と見立ててよいこと、これらの能力〈とは同一である〉のは能動と受動の差こそあれ、〈理性〉なる名称に変わりないに等しいということが読み取れるか

らである。また後述にある通り、〈思惟されるもの（受動的理性）〉に〈思惟するもの（能動的理性）〉が作用する、すなわち後者の理性の作用によって、前者の理性が〈判断する〉（下記引用文④参照）対象たる〈質料〉を、要は〈受動的理性〉自身たる〈質料〉を〈形相〉にされるとみられることから、各能力〈とは同一である〉にちがいない。それゆえ〈理性（思惟するもの）は、「思惟されるもの」という属性を所有する〉はこの謂であろう。

そうであれば、〈受動的理性〉が〈受動的〉であるためにも、当初より〈質料なしにあるもの〉の一であるとは断じられない。なぜなら引用文⑤の二度目の語〈理性〉にあって、〈思惟されるもの（受動的理性）〉なる〈質料〉を欠いては、その〈思惟するもの（能動的理性）〉たる〈形相〉さえ成り立たないであろうと察知されるからである。このように捉えないと、なぜアリストテレスは二つの理性を用意したのか明らかにならない（のちに感覚を問題にするが、その感覚にすら、〈質料〉と〈形相〉が認められると書かれるからして、まずは二つの〈理性〉はこれと同様であるといわなくてはなるまい）。

そこからはまた、二つの〈理性〉は何らかの関係をもたざるを得ないといえる。それはさらに⑥の次の文章に従い、多少の語を補ってみれば、〈理性（能動的理性）はこのようなものども（〈ものども〉は複数回にわたる受動的理性）〔の形相を知るところ〕の、質料を持たない能力〕というなかでの関係にあらう。別言すると〈思惟されるもの（受動的理性）〉は〈思惟するもの（能動的理性）〉につながることに於いてのみ、〈思惟するもの（能動的理性）〉は、⑦でいう〈現実活動（もしくは周知の《現実態》）〉にあることが可能となり、この〈現実態〉こそまさに〈形相〉に相当するのである。だから〈能動的理性〉が〈受動的理性〉で探られたその〈質料〉の〈本質〉に到達する能力であるとき、〈能動的理性〉は〈形相〉であり得るし、〈受動的理性〉の方は⑧のように、〈能動的理性〉の〈属性〉にしかなり得ないとみてかまわないのである。

しかし〈受動的理性〉のこともさりながら、まず先に〈能動的理性〉たる能力とはいったい何かをアリストテレスに聞く必要がある。すると彼は以下のようにいう。

④認識することは靈魂の働きであり、また感覚することも、判断することも、さらにまた欲望することも、意志することも、一般的に言って欲求は靈魂の

働きであ(る) (からして),⁽⁴²⁾ (括弧内は筆者)

〈認識することは靈魂の働きであ〉るという〈靈魂〉は、たとえば既出引用文⑩の〈感覺的(能力)〉に呼応する〈感覺する〉さえ有すると語られるであろうが、しかしてその⑩に〈いくつかの能力(⑪でいう〈認識する〉や〈感覺する〉などの能力)の原理であ〉ると記されるにあつて、〈いくつかの能力の原理であ〉るとは何か、⑪に引き続く次の引用文に聞けば、諒解されよう。

⑪他方... 成長も盛りも老衰もそう(靈魂の働き)であるからして、これらのそれぞれ(⑪の諸能力や成長、盛り、老衰)は靈魂の全体に存するか、そして靈魂全体を以てわれわれは思考(惟)し、感覺し、運動し、またその他のそれぞれのことをなしたり、なされたりするのか、それともそれぞれの部分を以てそれぞれ別のことをするのか。⁽⁴³⁾ (括弧内は筆者)

筆者は〈いくつかの能力〉が、たとえば既出引用文⑩では〈感覺的、思考(惟)的能力〉の、同⑪では〈思考(惟)し、感覺し〉の語順で記されるのに注意し、各語順にある意図を感じつつ、それを推測する。〈靈魂全体〉の視点でいうと、後者は他の能力と無関係に行使されるし、前者は相互に関係する能力となる。だから〈いくつかの能力〉に〈原理〉があるとすれば、それは後者のあり様でなしに、ある能力が次の能力とつながることであろう。そこで各能力が〈靈魂〉の〈部分〉としてでなく、〈靈魂の全体〉の能力を駆使させて作用されるわけである。そう理解するは、〈感覺する〉という〈質料〉が働いて、その〈形相〉を〈靈魂(われわれ)〉に知らしめ、次なる能力の〈形相〉を見出すことにつながる必要があるからである。各能力や〈靈魂〉は最初から〈形相〉であり得ず、身体たる〈質料〉を活用させ、その〈形相〉の生成をみることになる。それに〈靈魂〉は諸能力を有し、諸〈能力の原理である〉のだから、諸能力の関係を解かずして、〈靈魂〉が〈形相〉になることはない。

〈靈魂〉を〈形相〉にさせるのが既出引用文⑪に〈認識すること〉と書かれる、その原動力たるべき〈能動的理性〉なのであり、この能力が働くことで生成される〈形相〉が生成の終りとしての〈能動的理性〉自身の、かつ〈靈魂〉の〈形相〉になる。だが本来〈靈魂〉の〈形相〉はその〈全体〉の諸能力に依

拠して語られるのであり、〈部分〉としての能力だけで〈形相〉にはなり得ない。証明は再度〈能動的理性〉を持ち出すことで可能である。これは④の〈感覚する〉の次の〈判断する〉〈受動的理性〉に〈能動〉的に働きかけて、〈認識すること〉、別言すると〈感覚〉の〈形相〉が〈受動的理性〉と〈能動的理性〉とにつながって一つの完璧な〈形相〉になることである。〈能動的理性（質料）〉は直接には〈受動的理性〉の〈形相〉と関係するし、〈受動的理性〉の〈形相〉はその〈質料〉中にあるからして、確かに〈能動的理性（質料）〉とつながり得るわけである。だが〈能動的理性〉自体はアリストテレスが⑤で記す〔質料から〕独立で、不受動的で、まじり気のないものでという〈形相〉をさしはしない。しかして彼が⑥で〈能動的理性（質料）〉なる〈理性は自分ひとりで自分の力によって思惟活動をする〉と強調するとき、〈能動的理性（質料）〉さえ〈思惟活動〉の役割を受け持たざるを得ない。その〈質料〉自身は〈思惟活動〉の対象をもとより〈受動的理性〉の〈形相〉に定めおきながら、しかし〈自分ひとりで自分の力によって思惟〉する以上、〈能動的理性〉は、すでに〈質料〉を離れているに等しいと読まなければならない。とどのつまり〈能動的理性〉のみは〈思惟〉するゆえに、この能力は〈質料〉なしが問題となるが、端から〈非質料〉とされる。これが前提で、〈靈魂〉が〈形相〉にもなろう。

〈能動的理性〉はまた、アリストテレスがいうところの〈理論的理性〉にふさわしくあろう。

①理性と言っても、それは或るもののために算段する理性、すなわち実践的理性のことである。そしてこれは理論的理性から〔この「ため」という〕目的によって異なっている。⁽⁴⁴⁾

上記引用文の提示で、アリストテレスがいう〈理性〉には、〈実践的理性〉と〈理論的理性〉、別言するとそれぞれ〈受動的理性〉と〈能動的理性〉なる二つの〈理性〉のあることが証明される。さらに〈実践的理性（受動的理性）〉が〈或るものために算段する〉というこの理性は、〈或るもの〉であろう、「生成の終り」としての〈形相〉に、または〈理論的理性（能動的理性）〉にかかわるしかないことを確実にさせる。

そこで今度は、〈実践的理性（受動的理性）〉は何かと問う必要がある。〈受動

的理性)はまず、既出引用文㊦の〈思考(惟)的能力)に与する点で〈能動的理性)と同じであり(ただし〈能動的理性)が〈非質料)であるに反し、〈受動的理性)は〈質料)も有す)、㊧でいう〈(能動的)理性)の〈属性)とも指摘し得ること、次に、㊨に〈感覚される形相のうち)に思惟されるものどもはある)と語られては、〈受動的理性)は〈感覚)の〈形相)が〈思惟されるもの(能力)〉として受け入れられる能力であること、要は〈感覚(形相)〉を受けずにおれないから、〈受動的)能力でしかなくなること、また㊩で〈受動的理性)の方は可滅的なもの)と記されるにあつて、その〈形相)は、〈感覚)の〈形相)と同様に、〈靈魂(質料)〉のうちにある〈形相)であり、いかに〈能動的理性)につながるとみても、〈受動的理性)の〈形相)は〈可滅的)なかぎり、そのとき消滅すること、そして、㊪で〈靈魂)の能力であると述べた〈判断する×受動的理性)にとっては、〈判断する)能力だけに、〈実践(経験)的)な思惟能力にとどまらざるを得ないことを示唆させてこよう。

既出引用文㊫に書かれる〈算段する)は、およそ上記した〈判断する)なしには何を〈算段する)か不可能になる以上、そこに〈実践(経験)〉が要求される。それでも〈靈魂)の〈判断する)働きが〈受動)でなしに、〈能動)の表現をとるのはなぜか。それは〈受動的理性)が〈感覚)の〈形相)を受け入れて〈思惟されるもの)になるは、〈判断する)働きが必要だからであり、〈判断する)という〈能動)にてはじめて、〈受動的理性)になり、その〈形相)が生成されるからである。

〈受動的理性)はその〈形相)を〈判断する)代わりに、〈意志する)をもって生成させはしない。〈意志する)は既出引用文㊬を参照すれば一目瞭然、〈欲望する)とともに、〈欲求)に組み込まれる能力になっている⁽⁴⁵⁾。また〈感覚する)にとって、何より㊭の〈感覚は感覚されるものどもの形相である)という文章がいかに理解されるかにかかってくる。筆者は終始、〈感覚されるもの)の〈もの)を能力、すなわち〈靈魂)の〈感覚する)と語ったつもりである。〈もの)は確かに、外的対象たる〈事物)であってもよい。だが〈事物)と受け取るにせよ、〈事物)と〈感覚する)は一つの同じ質料になり得ることがこの場合認められていなければならない。感覚器官で〈感覚される事物)はおよそ神経を伝わり、〈靈魂)に受け入れられよう。〈靈魂)が受け入れるだけで、〈感覚)の〈形相)は成り立ち得ようか。そこには〈靈魂)の〈感覚する)が必要とな

る。この〈感覚する〉能力なしに上記文章の冒頭語〈感覚〉の名称は生まれてこないとみる。㊦の〈感覚し〉を含めた〈感覚する〉はまた、㊧の〈感覚的(能力)〉、㊨の〈感覚能力〉と同義である。それは〈靈魂〉の能力を表現する語であるから。しかしながら〈感覚されるもの〉を〈事物〉でなしに、〈感覚される能力(感覚する)〉に捉えおかないと、〈感覚する〉を筆頭にした、〈認識する(思惟する)〉、〈判断する〉、〈欲望する×靈魂〉の諸能力は、いったいどこで使用されることになるのか、不明のままに終るであろう。だが〈感覚されるもの〉、㊩中の〈思惟されるもの〉の各〈感覚(思惟)される〉は〈受動〉であるために、〈感覚する〉、〈判断する〉とは別に理解する方が妥当である。

さらに既出引用文㊪の語句を補足説明しておく。〈その形相〉は〈石の形相〉であろうが、この〈形相〉は〈靈魂のうちにある〉とされるから、〈感覚〉の〈形相〉、〈受動的理性〉の〈形相〉を(ただし〈能動的理性〉の〈形相〉は除かれる)含み得ると、また〈靈魂は手のようなもの〉とは上記中の〈感覚〉と〈受動的理性〉の各〈形相〉が〈靈魂(質料)〉と切り離せない〈形相〉と語られるのであれば、〈手〉を当然〈質料(道具)〉と見立てるところでの表現でしかなかろう。だが繰返す通り、〈能動的理性〉の〈形相〉は〈理性は形相の形相である〉からして、筆者がいった「形相中の形相」であり、しかも〈質料〉と切り離された〈形相〉なのである。それゆえ〈能動的理性〉以外、例の〈感覚されるもの〉や〈思惟されるもの〉が別名を有する際、おのおのは〈感覚〉や〈受動的理性〉となり、この名称ではみな〈受動〉的能力でしかない。

以下の諸引用文には、これまでに述べてきたことが確認されるだけでよしとしなければならないし、ときに新しい視点にて語られる引用文もあろう。が今すぐ新しい視点を問う余裕はない。何しろ再度デカルトに登場してもらわねばならぬからである。

㊫思考(惟)は、欲求されるものが出発点であるということによって、動かす...。(46) (括弧内は筆者)

㊬「理性が欲求なしには動かさない」ということは明らかである。(47)

㊭思惟することも感覚することとは同一ではない。... 表象は感覚や思考(惟)

とも別なものである。そしてそれは感覚なしには生じない、また表象なしには思想は生じない。しかし表象と思想とが同一でないということは明らかである。⁽⁴⁸⁾ (括弧内は筆者)

㉑表象は現実態にある感覚（今まさに〈感覚〉している感覚）から生じた運動である。⁽⁴⁹⁾ (括弧内は筆者)

㉒表象像なしには靈魂は決して思惟しない。⁽⁵⁰⁾

㉓思惟能力(受動的理性の思惟能力)は表象像のうちで形相を思惟する。⁽⁵¹⁾ (括弧内は筆者)

㉔何故なら表象像は〔理性(受動的理性)にとって〕感覚像のようなものであるからである。⁽⁵²⁾ (丸括弧内は筆者)

㉕感覚が身体を通して靈魂に生ずるといふことは論議によっても論議を離れても明らかである。⁽⁵³⁾

㉖思惟するもの〔理智(能動的理性)〕は感覚とともにでなければ、外部のものを思惟することもできないのである。⁽⁵⁴⁾ (丸括弧内は筆者)

結語を先きにするに、それは筆者において、デカルトがアリストテレスの認識論を自らの〈日常的用法〉の認識論に織り込むだけか、さらに〈真理の探求〉の認識論的構想を思い立つ契機にしていたとみるところにある。アリストテレスはある〈事物〉の〈形相(本質)〉を〈感覚(質料)〉とその〈形相〉、次いで〈受動的理性(質料)〉とその〈形相〉、そして〈理性は形相の形相である〉とする既出引用文㉑に従っては、〈能動的理性(形相)〉とその〈形相〉(〈現実態〉にある能動的理性)にかけて認識したのである。

このつながりのなかで、デカルトがいう〈日常的用法〉の認識論は、前段中の〈受動的理性(質料)〉とその〈形相〉(の流れ)までを、別言すると上記引用文㉑の範囲を扱うこととなる。㉑の〈理性〉は受動的な能力と受け取られてい

るために、〈日常的用法〉においてしか活用できず、当の〈日常的用法〉では〈自然的理性〉であるほかなくなる。〈自然的理性〉は〈自然〉と名付けられるだけに、〈感覚（または欲求）〉にかかわれずにおれない能力となる。むしろデカルトはアリストテレスが問うような、〈感覚〉や〈受動的理性（自然的理性）〉の各〈形相〉自体を問題にすることはない。また〈自然的理性〉の各能力が働いて誕生する〈情念（passion）〉や〈意志（volonté）〉などの効能を解いたりするにしても、彼はその〈形相〉を本質として究めたりはしない。かといって上記した諸能力が〈質料〉であることを強調するわけでもない。要は〈日常的用法〉での諸能力が〈質料〉と〈形相〉を含むかに関係はしないし、〈日常的用法〉で、「生成の終り」としての能力の〈形相〉が問われることもない。つまりこの〈形相〉のことは〈真理の探求〉で質されようが、しかし〈真理の探求〉はここに取り入れられないであろう。

〈真理の探求〉の方は、アリストテレスの引用文でいえば、多少訂正したうえでも、②に該当しよう。②の〈理智（性）〉は〈思惟するもの〉という能動的な能力であったために、受動的な能力を断ち切る用法〈真理の探求〉においてしか活用できず、彼はそこではたんに〈理性〉と名付けるほかなくなる。したがって②から〈感覚とともに〉の語句を削除し得るならば、②は完全に、デカルトのいう〈真理の探求〉をさすと指摘できるであろう。

さらにアリストテレスの認識論から、筆者がデカルトに〈真理の探求〉（の構想）を思い立たせたと捉えたのは、デカルトが〈わたしが事物の全き本質を形相因とみなす（とき）、その点において、わたしはアリストテレスの一後継者でしかない〉と述べた既出引用文⑤に立ちこそすれである。〈事物の全き本質を形相因とみなす〉にかかわる理性は、ことが〈全き本質〉と語られるゆえに、アリストテレスでは当然〈能動的理性〉であり、デカルトでは〈真理の探求〉をめがける用法の〈理性〉でしかないことになる。そこでこの〈真理の探求〉を明示させよう文章において、なぜにアリストテレスの名が刻まれるのかである。これこそ〈真理の探求〉にアリストテレスの認識論が絡む証しとならないか。そうなのである。

〈真理の探求〉に対し、アリストテレスの認識論の何が反映されているのか。それはいわずと知れたこと、〈能動的理性〉であり、これを中心にした考え方をアリストテレスの認識論から抽出独立させ、かの用法に仕立て上げることにあっ

たからである。〈真理の探求〉(〈形相〉の獲得)のうてで働く理性はしかし、プラトンの語るごとき〈死の訓練(苦しみ)〉を自らに課すことで、〈真理〉を導かせる〈理性〉ではなかったのである。あの〈真理の探求〉(〈形相〉の獲得)に与する人は、自らを放棄させず、自らは〈質料〉と離れた〈形相〉である〈(能動的)理性〉を持ち合わせるといつてのけたが、デカルトもこの理性の方を真似たといえるのである。なぜなら、アリストテレスの〈靈魂〉が〈受動的理性〉における〈形相〉なる〈思惟〉対象を、〈能動的理性〉における〈形相〉として〈思惟する〉ことは、デカルトの〈精神(esprit)〉(の理性)が〈外部のもの(事物)〉という〈思惟〉対象を、〈非物質(非質料)〉として〈思惟する〉ことと同じであるからである。

しかしなぜ〈真理の探求〉の精神が〈esprit〉とみなされたのか⁽⁵⁵⁾。これも実はアリストテレスの考え方を継ぐことによる。アリストテレスのいう〈靈魂〉を〈質料〉ではなく、〈形相〉と語るは、〈能動的理性〉がその〈形相〉を生成させるべく働くことなしに成り立つことではなかった。さすれば〈能動的理性〉の方が〈靈魂〉のことより優先させられねばならないであろう。

だからこれを踏まえるデカルトはむしろのこと、アリストテレスの〈能動的理性〉と〈靈魂〉に対しても、同じ問題がつきつけられる。たとえば〈能動的理性〉で捉えた〈形相〉は、それによって〈非質料〉とされた〈靈魂〉といかなる関係を有するとみるからして、かくいえるのかである。既出引用文㉑に〈表象と思想〉という語句があった。筆者はこの語句にデカルトの語句を適合させてみる。筆者の見方では、〈表象〉(または㉒や㉓の〈表象像〉)は〈像〉と、〈思想〉は〈観念〉となる。ある〈外部のもの(対象)〉をアリストテレスでは〈感覚〉において〈表象〉するのに反し、デカルトではこの〈表象〉をかたちづくる〈感覚〉を排除するが、それでも両者にとって、〈表象(像)〉は〈質料(物質)〉にほかならないと捉えることでは同じであった。だが㉑に〈表象なしには思想は生じない。しかし表象と思想とが同一でない〉と語られることが、〈質料〉である〈表象(像)〉に〈形相(非質料)〉に見立てられた〈(能動的)理性〉が働くことを促さずにおれなくさせるし、その働きにおいて、〈思想(観念)〉を誕生させ(ここに〈表象と思想とが同一ではない〉とする証しがある)、もって〈形相(非質料)〉でしかない〈靈魂(esprit)〉をもたらしことさえ示唆するに至る。〈(能動的)理性〉における〈思想(観念)〉が〈形相〉としての

〈靈魂 (esprit)〉を生じさせる関係は、〈(能動的) 理性〉の優位なしには成らないにちがいない。要するに、アリストテレスでいえば完全に〈認識する〉こと自体が、デカルトでいえば完全に〈理解する〉こと自体が、前者での〈能動的理性〉による〈認識する×形相〉を、後者での〈理性〉による〈理解する×形相 (観念)〉をあらわすのであり、その〈形相〉や〈観念〉は、前者では〈形相の形相〉に、後者では〈生得観念〉になり得るがゆえに、〈形相〉の生成や〈生得観念〉の誕生をまって、それぞれ〈靈魂〉や〈esprit〉といわせるようになった (だからデカルトは彼と同じ考え方をした) ということである。

さらにある〈外部のもの (対象)〉を〈感覚〉にかけたあと、〈受動的理性〉と〈能動的理性〉がアリストテレスの場合、順次働きかけることになるが、その際の問題は、〈能動的理性〉自体の〈形相〉をいかにすれば〈質料〉でしかない〈受動的理性〉 (が生成する〈形相〉) とつなげ得るか、別言すると〈受動的理性〉の〈形相〉が〈能動的理性〉にとって〈思惟〉対象となるとき、〈受動的理性〉の〈形相〉は〈靈魂 (質料)〉のうちにとどまっているのか否かである (デカルトにおいて〈受動的理性〉に対応しよう〈自然的理性〉は〈日常用法〉の〈精神 (âme)〉の一能力であるからして、〈真理の探求〉の〈精神 (esprit)〉の〈理性〉と関係を保有することはないし、もとより〈自然的理性〉はこの〈日常用法〉のもので、アリストテレスのいう〈受動的理性 (自然的理性)〉の〈形相〉をみることさえ必要としない)。そこが明確にならないかぎり、アリストテレスにあっては、〈質料〉のなかにあると語られる、〈感覚〉や〈受動的理性〉の各〈形相〉 (それはいかなる〈形相〉か) に比して、〈質料〉と離れたとされる、〈能動的理性〉や〈靈魂〉の各〈形相〉とは何か、わけてもこの各〈形相〉はどこに見出されるかは、不明のままに終始しよう。そしてアリストテレスの〈後継者〉デカルトもまたこれを明かし得ないと、さらに前者の認識論は後者の両用法のそれを含むといえる (註(57)註欄参照)。

デカルトがアリストテレスの認識論の何かしらを踏襲したことを明かす例として、〈靈魂〉の諸能力のことがある。〈靈魂〉の諸能力について述べよう既出引用文①と、おそらくこの①に倣って記したであろうデカルトの既出引用文③や④⁽⁵⁶⁾がそうなのである。①はただし、そこに掲げられた〈認識する〉こと以下すべて、〈靈魂の働き〉としての諸能力をさすことになるが、それでも各能力は、たとえば〈認識する〉は〈能動的理性〉に組み込まれるように、それぞ

れの役割を背負わされると指摘し得る。

これに対し、既出引用文③や⑪の諸能力は、たとえばアリストテレスの場合と同様に、〈感じる〉を〈感覚〉とかかわらせることを含意させながら、それにとどまらない役割をもつ。③や⑪の諸能力は、〈真理の探求〉における〈精神 (esprit)〉のそれに活用され、〈想像し、感じる〉以外の諸能力によって、〈真理〉を究めよう役割を担っていた。ところがデカルトは同じ⑫の諸能力のうち、〈感覚する×感覚〉と〈判断する×受動的理性〉とがかかわるという関係を見抜いて、自らの〈日常的用法〉を打ち立てたといわねばならぬから、③や⑪の諸能力をば〈真理の探求〉ばかりでなく、〈日常的用法〉の諸能力としても役立たせなくてはならないと考えたはずである。しかり、③や⑪の諸能力を〈日常的用法〉用の諸能力にも当てはめておかないと、そもそも〈日常的用法〉やその〈精神 (âme)〉は何んのためにあるかということになりかねない。

その諸能力はデカルトにとって、〈思惟する (penser)〉たる語で一括されて捉えられていた。アリストテレスの方はどうか。

②思惟することも思慮することも感覚することの一種であるように思われる (というのはこれらの両方において靈魂はあるものどものうちの何かを判断して認めるからである)。⁶⁷⁾

②に従うと、〈思惟する (思慮する)〉はむしろ〈感覚する〉に含まれ収められる印象にある。〈感覚する〉が既出引用文⑬で〈認識する〉に次いで記されることは、上記の証しとなると同時に、デカルトが〈精神 (esprit や âme)〉の諸能力である〈想像し、感じる〉をあえて末尾に付け足すごとく書くのとは大いに異ならせるのである。

また既出引用文⑭の〈思惟するもの〔理智〕は感覚とともにでなければ、外部のものを思惟することもできない〉を踏まえると、再度いうが、〈能動的理性〉にみる、〈外部のもの (対象)〉を獲得せんとする〈形相 (真理)〉にとって、〈感覚〉や〈受動的理性〉がその前提条件であり、これらの能力はおたがいかかわるうへは、この例からも〈感覚〉が重視されるといわざるを得ないわけである。かりに〈感覚〉(の〈形相〉)が〈受動的理性〉につながらないとすれば、〈感覚〉の〈形相〉はむろんのこと、〈受動的理性〉の〈形相〉も不完全に

とどまるどころか、生成されることはない、そのとき〈受動的理性〉には〈能動的理性〉の働きかけは当然ないと読み取らねばならないであろう。だから〈判断する〉や〈認識する〉こともなくなるにもかかわらず、アリストテレスはこれらの〈思惟（する）〉能力をそれぞれ、〈受動的理性〉や〈能動的理性〉に限定させて語ったがゆえに、その〈思惟（する）〉には、デカルトのいういわゆる《思惟する（penser）》とは相違して、たとえば既出引用文④の〈感覚する〉、〈欲望する〉や〈意志する〉などが含まれることはなかったと察知する。それでも〈靈魂〉の上記した諸能力は、デカルトの既出引用文③や⑩に〈esprit〉や〈âme〉の各〈精神〉用として共通に使用されるごとく記される諸能力と同様、すべて〈能動〉であることには間違いないのである。

デカルトのいう諸能力のうち、〈真理の探求〉の〈esprit〉にとって欠かせないのが、完全に〈理解する〉という〈理性〉であり、そのことを繰返し強調しておかざばなるまい。この〈理性〉のめざすところは、アリストテレスが〈能動的理性〉でいう、その「生成の終り」としての〈形相（真理）〉を見出さんとすること、要は〈能動的理性〉自体の〈形相（真理）〉を求めんとすることと何んら異なるのではない。〈真理の探求〉を構想するとき、デカルトはアリストテレスのいう〈能動的理性〉を〈理性〉と捉える以上、およそそれとは別の理性、たとえばプラトンのいう理性をもって、〈能動的理性〉に当てはめることができなくなる。とすれば、〈真理の探求〉に反映されるはもとより、プラトンのよりアリストテレスの〈形相〉として主張される〈能動的理性〉である、別言するとデカルトの〈理性〉がいかにか把握されたかは、〈能動的理性〉が打ち立てられる過程に相似させて見出されたということが出来る。さらにデカルトはこの〈能動的理性〉が〈受動的理性〉につながって働くことを知っていたのだから、〈受動的理性〉と無関係な、いわば当初より独立したごとき〈能動的理性〉を、〈真理の探求〉用の〈理性〉に用いたのではなかろう。とすれば、この〈理性〉を中心に展開する〈真理の探求〉の認識論は当然、アリストテレスのいう〈能動的理性〉を除いて成ると指摘し得る〈日常的用法〉の認識論のあとに考究されたとみてかまわぬであろう。

もちろん〈真理の探求〉は、ある〈外部のもの（対象）〉に対して、〈想像し、感じる〉能力をかかわらせることに無縁であって、〈理性〉のみでその〈対象〉の〈形相（真理）〉を完全に〈理解する〉ことにより、つまりそれが同時に〈理

性) 自体の〈形相〉となる〈作為観念〉を誕生させることにより、〈作為観念〉がその〈真理〉たる〈生得観念〉に重なり合うことにあった。だからこの点で、アリストテレスの認識論がある〈外部のもの(対象)〉の〈形相(真理)〉を、たえず〈感覚する〉からはじめて、〈判断する〉や〈認識する〉を通さずには獲得できないとされるのとは相違しているにちがいない。

ところで〈日常的用法〉における〈感じる〉もまた、〈思惟する(penser)〉の諸能力の一として、そこに加えられていた。しかしながら〈感じる〉は〈真理の探求〉での〈感じる〉とも違う別の扱われ方をされていた。〈感じる〉あるいは〈想像する〉は本来、〈日常的用法〉では〈âme(脳本体)〉の各能力であった。だが各能力は〈脳本体〉内で働くのではなく、そこから〈神経を介して〉出て、デカルトがこれをも〈âme〉という〈腺H〉にての、〈感じる〉の働きが〈sentiment〉なる〈感覚〉を、〈想像する〉の働きが〈imagination〉なる〈想像〉を産出させると断じる能力でしかなかった。しかもこの新たな能力の〈感覚〉や〈想像〉は〈脳本体〉内に入り、さらに〈感じる〉や〈想像する〉以外の〈思惟する〉能力の働きかけを受けることで〈情念〉や〈意志〉を誕生させるに役立つが、誕生した各能力はアリストテレス的のいうその各〈形相(真理)〉に達し得ない。なぜか。もし〈感覚〉、〈想像〉、〈情念〉や〈意志〉の各〈形相(真理)〉が〈日常的用法〉でも確認されようものならば、デカルトが他方で語る〈真理の探求〉たる用法は不要でしかなかろうと繰返し得るからである。

またデカルトは〈感じる〉や〈想像する〉を含めた〈思惟する〉諸能力をなぜ、〈脳本体〉内外で働くように区別してしまったのか。それは〈日常的用法〉では、〈感じる〉や〈想像する〉能力は、〈脳本体〉から出て働くがゆえに、各能力が〈真理の探求〉で無視されるのに比べると、それでも出てゆくという役割をもつわけだから、結局は〈真理の探求〉のその各能力と同じような扱われ方を意味させる。〈脳本体〉内で働き得ない各能力は、それこそ〈âme〉の各能力とはみなされないのである。ということで〈日常的用法〉にあっても〈真理の探求〉と同様、〈感じる〉や〈想像する〉以外の〈思惟する〉能力が優先され、〈感じる〉や〈想像する〉より優位に立つのみか、その〈思惟する〉が主に〈腺H〉より〈脳本体〉で働くからこそ、〈思惟する〉この部位をさして〈âme〉(理性的精神)と呼ぶことになる。別言すると〈感じる〉や〈想像する〉のかかる役割とは〈日常的用法〉において、身体の〈sens〉や〈imagination〉にかかわ

ることにあり、しかもこの〈感じる〉や〈想像する〉が〈âme〉の各能力とされたところで、身体ともっとも密接な各能力と捉えられるかぎり、各能力以外の〈思惟する〉能力の方が、身体に関係する各能力より優位にならざるを得ないとみることができるとは、なぜか〈思惟する〉は〈âme〉にとって、〈外来像〉ではなく、「作為像」をもたらす唯一の能力となるからである。

筆者はこのように、〈日常的用法〉における〈感じる〉や〈想像する〉によって産出される〈感覚〉や〈想像〉を〈外来観念〉といわず、〈外来像〉と、〈感じる〉や〈想像する〉以外の〈思惟する〉によって産出される〈意志〉を〈作為観念〉といわず、〈作為像〉と名付けることにする。〈情念〉の方は〈âme〉(理性的精神)にあっての〈外来像〉になる(〈作為像〉ではない〈情念〉をさらに〈作為観念〉としたならば、〈真理の探求〉でいう〈作為観念〉は不要となる)とは、また〈真理の探求〉には〈外来観念〉を除く〈作為観念〉と〈生得観念〉があるとはすでに指摘していたところである。〈像〉と〈観念〉に関しては、アリストテレスが〈能動的理性〉による〈思想〉を、デカルトはこれに呼応させて、〈理性〉による〈観念〉を示していたことが、区分けして呼ぶことにした理由である。〈日常的用法〉において、その〈能動的理性〉である〈理性〉はデカルトに用いられることはなかったからである。するとシモーヌ・ヴェーユのいう既出引用文◎〈観念論と実在論はデカルトにとって、たんに両立し得るだけでなく、相関的でもある〉は、〈日常的用法〉をして〈外来像〉として語られる〈実在論〉に依拠たらしめるのみで、たとえ〈外来像〉を〈自然的理性〉で〈作為(思惟)する〉といえども、〈自然的理性〉の行使であるからして、〈観念論〉に従わせることはないために、〈真理の探求〉に当てはまるだけであるとみておかねばならなくなる。

さすれば、〈日常的用法〉はいったい何をめざしたことになるのか。それはいうまでもなく、〈感覚〉と〈自然的理性〉がいかにかかわっているかを、要はその身体と精神(âme)にわたる生理的組織(構造)を明らかにすることであった。それゆえ、この〈日常的用法〉の思想の支えなくして、〈真理の探求〉の成立をみないことが明かされるは、〈日常的用法〉が〈真理の探求〉より先きの研究対象にならざるを得ないことを示唆させるとともに、シモーヌ・ヴェーユがまた〈社会学の形跡〉を残すことはできないと語ることも、この〈日常的用法〉に当然充当してくるであろう。

デカルトがスコラ神学（哲学）を批判したがゆえに、彼はアリストテレスの認識論によって立つことで考究し得た〈日常的用法〉を表面切って表明できなかったのではなからうか。あるいはこのために、カルテジアンもまた、〈真理の探求〉のみを称揚し喧伝あいつとめてきたのではなからうか。だがアリストテレスに倣うこの〈日常的用法〉のこともっと前面に押し出し明るみに出さなければ、デカルト思想の全体像が浮かび上がってこないし、〈真理の探求〉のさらなる明確化が待望されないどころか、〈真理の探求〉や〈日常的用法〉にとどまらない（とどまるならば、デカルト思想はプラトンやアリストテレスの各思想を越えることができないであろう）、デカルト思想の独自性が打ち出されてこないといわなくてはならないであろう。

〔続〕

なお、以下の註の番号が(25)からはじまるのは、本稿が前号「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕」の脱稿と同時に書かれていたものであるからである。

註

- (25) René DESCARTES 〈OBJECTIONS ET RÉPONSES (CINQUIÈMES RÉPONSES)〉 P.477
- (26) René DESCARTES 〈LETTRES (A ÉLISABETH)〉 P.1158
- (27) 〈腺H〉や〈脳本体〉のことは「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕」でも触れておいたが、おのおのについてはすでに上記紀要〔V〕で語ったし、次回同〔VI〕で完結させる予定である。
- (28) René DESCARTES 〈RÈGLES POUR LA DIRECTION DE L'ESPRIT (RÈGLE XII)〉 P.83（これは第二命題の〈je suis, donc Dieu existe（わたしは存在する、それゆえ神は存在する）〉とともに記される。）
- (29) René DESCARTES 〈LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE〉 P.620（これは SECONDE PARTIE 17 の タ イ ト ル 〈Que le mot de vide pris selon l'usage ordinaire n'exclut point toute sorte de corps〉の、またその本文中の語〈l'usage ordinaire〉を取り出し充当させたものである。）
- (30) 〈esprit〉と〈âme〉の相違については、「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕」、P.P.2-8 参照。
- 〈日常的用法〉の認識論については、上記紀要〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕〔Ⅳ〕〔Ⅴ〕と次回の

〔VI〕参照。

〈心身合一〉がみられるかどうかについては、上記紀要〔IV〕P.P.22-23, P.P.24-25, P.33, P.35〔V〕P.57参照。この問題は次回の〔VI〕で決着させる予定でいるし、同時に〈心身〉分離は可能なか問うつもりである（註(31)も参照）。

- (31) 前回紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補I〕』の引用文⑦で語られる〈精神 (esprit) が脳のこうした部分 (脳本体) に取って代わられる〉を、今回紀要の本文のように、「〈脳本体〉が〈esprit (精神)〉に〈取って代わる〉」とに置換され得るとする、その「取って代わる」とは、筆者にいわせると、デカルトがまるで言葉のうえで、〈脳本体〉なる〈質料〉を〈esprit〉に「すり (移し) かえ」たことに等しい、こうなると〈精神〉は実質〈脳本体〉をさすのと何んら変わらないことにしかならないのであって、そのとき⑦は少なからず、同引用文⑤⑥や⑨の内容に対し異なりをみせはしないかどうかを確かめておく必要がある。

⑤は〈精神 (esprit) が脳とは無関係 (独立) に働きかけ得る〉と、⑥は〈わたしは、… 身体から区別された観念をもつ〉と、⑨は〈観念自体はある種の形相なので〉と書かれていた。

これに反し、⑦で示されることは次のことであった。デカルトがまず、〈像が脳のいくつかの部分 (腺Hと脳本体) に描かれるというかぎりにおいて、この像を観念と呼ばない〉ことは、換言するとたとえば、〈腺H〉で産出した〈この像〉や〈脳本体〉に流れついては受容されよう〈この像〉を〈観念と呼びはしないことは (なぜなら彼 (わたし) は〈この像〉をおよそ、〈脳本体〉にても「排除」する (考慮に入れない) からであった)、その通りなのである。そして、〈観念〉と呼ばれるべきは、〈脳本体〉の〈思惟する〉が新たに〈物質的事物〉に向けて働きかけねばなくなるし、この働きかけによってはじめて〈この像〉が〈脳本体〉で描かれるようになるならば、〈精神 (esprit) が脳のこうした部分 (脳本体) に取って代わられる〉のであり、その〈かぎりにおいて〉、彼 (わたし) は〈この像を観念と呼んだことが読み取れるわけである。

しかし筆者は〈この像〉を、〈質料〉なる〈脳本体 (身体)〉から離された像であると捉えられないならば、〈この像を観念と呼ぶ〉ことは、また〈観念〉が前回紀要の註(15)註欄でいう〈精神そのものに根ざす観念〉とみることは不可能になろう。とどのつまり精神 (観念) が⑤⑥と⑨のそれぞれでいう、〈脳と無関係に働きかけ得る〉ことを、〈身体と区別された観念〉を誕生させるこ

とを、〈形相〉にすることをすべて否定するに至る。それはシモーヌ・ヴェーユが語るように、〈矛盾〉というものである。

このままにすておくと、要するに前回紀要の引用文⑦以下で、筆者が注釈として、「〈脳本体〉で描く〈この像〉こそデカルトにあって〈観念〉といわれる」と記した〈観念〉にとどまらせると、〈観念（精神）〉を身体と分離させる、〈心身〉二元の説さえ成り立たないと理解されかねなくなろう。これを成立させるためにも、何より〈観念〉は実際〈脳本体〉の〈運動（作用）〉にかかわっているにせよ、誕生するところは〈脳本体〉自体ではない、それゆえ〈精神〉もまた、そのありかを〈脳本体〉自体にみてはならないというべきである。

それならそれで、〈脳本体〉を離れたところは何かを、あるいは⑥⑥と⑨の前提において、〈観念〉や〈精神〉がどこにあるかを、デカルトは明記してしかなるべきなのだが、今だにそうした文章に接していない。したがってこの点が〈不明瞭、難点〉といわざるを得なくさせる。たとえば〈観念〉が〈脳本体〉の外に浮かび出（上がり）、浮かび上がるところが精神であるといったにしても、それも明確でないことは確かである。しかし少なくともそう捉えずには、永久に心身分離がみられないことも確かになるのである。（註(57)註欄参照）

- (32) René DESCARTES 〈OBJECTIONS ET RÉPONSES (QUATRIÈMES RÉPONSES)〉 P.458
- (33) アリストテレス全集 6 『靈魂論』 P.38, 山本光雄訳, 岩波書店。
- (34) Ibid., P.45 (そこに〈靈感は... 形相であるということになるだろう〉と記される)。
- (35) Ibid., P.43
- (36) Ibid., P.108
- (37) René DESCARTES 〈LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE〉 P.559
- (38) René DESCARTES 〈TRAITÉ DE L'HOMME〉 P.824, 〈DISCOURS DE LA MÉTHODE〉 P.166
- (39) アリストテレス全集 6 『靈魂論』 P.99, 山本光雄訳, 岩波書店。
- (40) Ibid., P.101
- (41) Ibid., P.102
- (42) Ibid., P.35
- (43) Ibid., P.P.35-36
- (44) Ibid., P.112
- (45) Ibid., P.113 (アリストテレスは〈意志は欲求であり、そして算段力によって

人が動かされる時には、また意志によって動かされる)や〈欲望は一種の欲求〉とみるからである。筆者は前文章の〈そして〉以降に語られる内容については、それが時間が経過したときの〈意志〉であるので割愛した。つまり筆者は「認識の起こり」を問うている。ちなみに時間的経過において用いられる〈意志(する)〉能力は〈欲求〉における〈意志〉ではなく、当然〈受動的理性〉における〈意志〉であろうと推察する。

(46) Ibid., P.112

(47) Ibid., P.113

(48) Ibid., P.93

(49) Ibid., P.97

(50) Ibid., P.106

(51) Ibid., P.107

(52) Ibid., P.108

(53) アリストテレス全集 6『自然学小論集』, P.182, 副島民雄訳, 岩波書店。

(54) Ibid., P.210 (アリストテレスは〈能動的理性〉たる〈理論的理性〉が考究するのは何も実行されるべきものではないし、また忌避すべきものや追求すべきものについて何も言いはしない) (アリストテレス全集 6『靈魂論』山本光雄訳, P.111) と記すし、また〈「思惟する」は特に靈魂に独特なものである〉(アリストテレス全集 6『靈魂論』山本光雄訳, P.6) というから、〈靈魂(人間)〉はこの時代から何でも〈自分の力〉のできる、「思惟する」唯一者であることになろう。

(55) 本稿註(31)註欄参照。

(56) 紀要「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕」引用文③P.21参照, 同⑩P.29参照。新潟大学人文学部人文科学研究, 第110輯。

(57) アリストテレス全集 6『靈魂論』P.92, 山本光雄訳, 岩波書店。

ここでアリストテレスの形相としての靈魂がどこにあるかが、デカルトの註(31)の精神(esprit)と同じか否かを問う。結語は同じとなる。だから前者は前者に相似する。精神(靈魂)は質料のないところにあるからだ。前者では能動的理性がその原動力となる。この能力は感覚や受動的理性につながる形相(㊦や㊧をみよ)を能動的理性たる形相として受け入れ、認識する。だがなぜ能動的理性を最初から質料ではなく、形相と断じるか。この能力を優位におくからだ。デカルトはさらに強引で、感覚を介さない理性が物質的事物(外部のもの)に対峙でき、これを思惟すると解いた。